贋作幽霊記念日

tontokaimo39

贋作幽霊記念日

「あら、永井さんじゃない」
「えっ、岸沢さん、何その格好？」
「ちょっと、かっこいいでしょう」
「こんなところで、コスプレ？」
「バイトよ、これここの制服」
「ここでバイトしてるの、あ、そうか岸沢さんの実家このあたりだったわね、ふうん仮面ライダープラスセーラームーンマイナスお尻かじり虫か」
「もう、何それ、メイドさんぽいのっての嫌だけど、これ気に入ってるのよ」
「ふーん、変わった制服でお客にアピールかホテルもいろいろ考えるのね」
「宇野さんお久しぶり、永井さんとは相変わらずの熱々なのね」

おい、おい、お久しぶりと言われても俺には全く心当たりが無い、夕子が変な目をして睨んでいる。

「ねえ、秋の海か山へ行かない」

と言う夕子の希望でやって来たのだ、今夜泊まる予定のホテルのロビーなのだが、まだ午前十時、チェックインは午後からだ。

「ふうん、いいホテルね、コーヒーでも飲んで行きましょうよ」

ということで腰を下ろしたところへ現れたのが岸沢という女性だった。

「宇野さん私が分からないの、ほら大学祭の宇野さんの講演、あのお話面白かった、感激したのでお話の

後、とびついてキスしたじゃない」
「えっ！」
「フフ、嘘よ、キスしようとしてふと永井さんの方を見たの、するとそこには魔女の顔が、怖くなってやめちゃった」
そうか、あの講演は意外とうけて、後で女子学生数人に取り囲まれた、まあ悪い気はしなかったが、夕子はすっかりむくれてしまったのだ。
「あらここに泊まるの、だったら後でお話聞きたいけどそれじゃあお邪魔虫ね、じゃごゆっくり」
「あの時のでれっとした喬一の顔見てられなかった、キスしてもらえなくて残念だったわね」
「よせよ、で彼女どう言う人だ？」

「同じ文学部の四回生だけど、専攻が違うし私と同期ではないからそれほど親しいというわけでもないの」
「こんなところでバイトか、学校は？」
「就職が内定して、卒論の目途さへつけば四回生ってのんきなのよ、海外旅行の費用でも稼いでるんじゃない、と、喬一、知らない振りをして、陰でこっそり彼女と」
「バカ言え、俺はいつでも誰かさんあるのみ」
「フフ、誰かさんって誰よ、でもそうよね、その顔じゃあ」
「おいおい」

と、バカな話をしながら、私たち二人は秋の海を満喫した、岬からの眺めは素晴らしいものだった、砂浜の波打ち際も歩いた、途中のレストランで昼食を済ませ、ホテルに

帰ったのは三時を過ぎていただろうか、
「あら！」
「うん？」
パトカーが三台、ホテルの前に止まっているのだ、
「何かあったのかな？」
「岸沢さんがいると話が聞けるわ」
と、ロビーの椅子に座ってあたりを見回したが彼女の姿は無い。
「宇野さんじゃないですか、それに夕子さんも」
「おっ吉森さんか、今日は知り合いによく会うな、午前は夕子、午後は俺か」
吉森と言うのはここ県警の警部、ある事件の犯人が都内に潜伏したことから警視庁を何度も訪れた、その際に夕子とも親しくなったのだ。

「何かあったのですか？」
「ええ、殺しです、被害者はこのホテルの女性です」
「まさかバイトの学生では？」
「いや、姓を青江と言う、正規の従業員ですが」
「で加害者の方は」
「それが、容疑者と思われる六人が消えてしまって…」
何！六人が消えた！？夕子聞くな、と思ったがそれは無理と言うものだ、例によって夕子の目は輝きを増してしてくる。

「私が予約を受け付けました、池上祐一という男性からですが、宿泊でないお客様の場合、代表者以外の方のお名前は記録していません。何でも結婚記念日の会合を開きたいと言うことで、同じ日に同じ場所で式を挙げ、新婚旅行

で申し込んでいたパックツアーも同じものだったので十日間ほど一緒に旅行をしているうちにすっかり親しくなったとおしゃっていました。三組のご夫婦です、今日がその五周年なのだそうで、私どもで式を挙げられたのなら何か記念品でもと思ったのですが、先年閉鎖されたところだったそうです、ただ同じここの海辺と言うことで私どものところが選ばれたのです。」

「フロントの仕事をうけたまわっています、予約時刻は十二時三十分、五分ほど遅れただけで池上様ご夫婦がお見えになりました、『後の四人は少し遅れそうなんだ、料理は揃ってから合図するからその後で頼む、必ず合図を待ってくれ』と言うことでしたので、厨房の方へ伝えました。それから二十分程してお二人、また二十分後にお二人、結

局お揃いになったのは一時を過ぎていましたので、また厨房へその旨伝えました、服装ですか、最初にお見えになったご夫人は和服、後のお二人は洋装、男性は三人とも背広でした」

「料理長です、フロントから揃ったと連絡があったのは一時十分過ぎでしょうか、しかし客の方からの合図を待てと言うことでしたので待っていました、ところが何の合図もないのです、やがて一時も三十分を過ぎてしまいました、料理は二十分程度の遅れには対応できるのですがそれ以上は無理です、そこで一人が部屋まで様子を見にいったのです、『誰もいないですよ』『何？そんなバカな』と言うことで今度は私が行きました、最初はドアの隙間からそっと覗いたのですが誰もいません、そこで部屋に入ったところ

机の下に青江さんが倒れていたの驚きましたが、すぐフロントへ伝えました」

「あの六人のお客様、玄関からは決して出ていません、ポーターも見ていないはずです、午後ですからチェックアウトされるお客様はいないし、チェックインには早い時刻、最も暇なころなので見逃すはずはありません、それも六人ですから…他の出入り口は宿泊されるお客様専用の駐車場に通じるところと、従業員と出入りの業者のための裏口がありますが、この二ヶ所は監視カメラが設置してあります、もう一つ正面東側にも出入り口はあるのですが、ここは夏の混雑するシーズンと緊急の時以外は施錠したままです、外に設置した非常階段が西側にあって、これは各階から使うことはできますが」

「と言うことですよ宇野さん、二つの監視カメラにそれらしい姿はありませんでした、裏口というのはかなり人の出入りが激しく、いろいろな業者や従業員が何度も出入りしていましたが、モニターで見ていた保安員も不審な人影には気づかなかったといいます」

「なるほど、非常階段は？」

「残るのはそれですが…ところが海辺でしょう風に吹き付けられた砂が積もっていました、使われていればすぐに分かる状態なのですが、最近使われた形跡は全く無いのです、ああ、容疑者が消えるという奇妙なことに気を取られて被害者のことを忘れていましたね、絞殺に間違いありません、首に細い紐の痕が付いていました、それから衣服が脱がされ裸でしたがその衣類は見当たりませんでした」

と、ここまで聞いたところで夕子がふと席を立った、トイレにしては長過ぎるなと思ったころに、奥から一人の若い男が現れ、その後ろから夕子も帰ってくる
「分かりましたよ！吉森警部！あっこの方は？」
「宇野さんと言って警視庁の方だ、上京の度にお世話になった、これはうちの若手で山岡といいます」
「警視庁ですか、よろしく、あのこちらは？」
すまして私の隣に座った夕子を見て、山岡は怪訝な顔をして尋ねる
「ああ夕子さんと言ってな、宇野さんのアシスタントにあたる方だ」
「え、警視庁は女性のアシスタントが付くのですか」
「宇野さんは特別なお方だからな」
吉森は私と夕子の関係を知っている、そこで適当にごまか

してくれたのだが、夕子なら私がアシスタントだと言うに違いない

「お前、分かりましたと言ってたな、何が分かったんだ？」

「あ、はい、考えたのですが容疑者が消えた方法です、でも警視庁の方の前ではちょっと恥ずかしくて」

と言いながら話したくてうずうずしているようだ

「このホテルの中に共犯者がいますよ」

「ほう、で？」

「容疑者六人の中の誰かが被害者の女性を殺して着ていた制服を脱がすのです、一人の女性がその制服を着て従業員になりすまし部屋から出たんでしょう」

「何のために？」

「共犯者がどこかに用意した五人分の制服を取りにです、このホテル、アルバイトや臨時職員をかなり使っていますから、制服を着ていれば、他の従業員は知らない顔に出会ってもおかしいと思わないのですよ」
「なるほど」
「で、残り五人も制服に着替えて裏口から外に出る、一度に出ると目立ちますから、一人ずつ時間をずらして出たのでしょう、制服がいい隠れ蓑です、だから保安員も気づかない」
うん？名探偵がもう一人登場か、と夕子を見たが、夕子はただ黙って聞いている、その顔に感心した様子もないが、軽蔑した様子もない
「だが山岡、脱いだ服はどうしたんだ、部屋には残ってなかったし、従業員は何人も外に出ていたが、荷物を持って

出た者はいなかったことをビデオで確認したぞ」
「きっと大きな旅行鞄にでも入れて、館内のどこかに隠しているのでしょう、それですよ！そこでいい方法があるのです、明日は徹底的に館内を捜索するという噂を流せば、館内の仲間はきっと今夜中に処分すると思います、かなりの量ですから焼くのは無理でしょうが、焼却場にも張り込めばいいですし、多分外の仲間が取りに来ると思いますから、そこを押さえれば館内の者と外の者を同時に捕えることができます」
「どう思います宇野さん」
「そうですね、まあやって見る価値はあると思いますが」
と夕子を見るが、夕子は相変わらず黙っている。

私たちは部屋に入った

「ライバルが現れたぞ、夕子はどう思う？」
「そうね、いい線行ってるわ、でも彼しゃべりたがり屋ね、もう少し控えめなら可愛いのに」
おいおい、それは夕子のことじゃないかと言いたい所だがそこは我慢するに限る、
「ねえ喬一、管轄外の事件でしょう、せっかくの旅行よ、気にしなくていいじゃないの」
うん！？それは俺のセリフじゃないか、まあ俺にしてもそれには賛成だが…
「ところで岸沢って子はどこへ行ったんだ」
「彼女時間制の通いだって、もう帰ってるのよ、喬一いやに彼女が気になるのね、やはり怪しい」

翌朝、朝食を済ませてロビーでコーヒーを飲んでいると、

吉森と山岡がやって来た
「おはようございます、宇野さん、夕子さん」
「あ、おはようございます、どうでした」
「それが、見事空振りですね」
「私の推理、間違いはないはずだったのに…」
と山岡
「まあいいさ、それほど期待はしてなかったんだ、問題はこれからどう捜査を進めるかだな」
「吉森さんがっかりしないで、ほらこれ、きっとこの人が犯人よ」
と、突然夕子が一枚の紙切れを吉森に渡した
「何？犯人だと！」
私も、後の二人も驚いてそれを覗いた、そこには一人の男の名前と、なんと住所まで書いてある

「おい夕子、どうして？」
「どうしてもこうしても、いいじゃないの、後は吉森さんにお任せね、今日もいい天気、これから行くところ楽しみだわ」
山岡があきれたように夕子をながめている、吉森も最初はぽかんとしていたがしばらく考えて
「夕子さんの言うことだ、よし当たってみよう、山岡行くぞ」
「え、ええっ、本気なのですか！」
夕子を知らない山岡が冗談だと思うのは無理がない、いや私もあきれたのだ、夕子はここで何かをしたか？私といっしょに吉森と山岡の話を聞いただけではないか、それで犯人の住所まで分かると言うならまさに神業だ、うん？彼女はしばらく姿を消していたな、岸沢という女性と大学の話

でもしていたのだろうと思っていたのだが…それにしても…

海から一転して山に入った、谷間の温泉地だ、紅葉には少し早いが空気は澄み切っている。海辺の華やかなホテルもいいが、こうした山間の小さな宿も風情があっていい、と言うのは私の歳のせいだろうが、夕子も意外とこうしたところを好むのだ。

くつろいでいると、二泊目を教えておいた吉森から電話が入った、

「夕子さんが言ったところを当たったのです、ずばりでした、男とその妻、ホテルを予約して最初に現れた池上と言う夫婦ですね、これは偽名で、本名は夕子さんが書いてく

れた通りでしたよ、まだ詳細は話さないのですが殺しだけは認めました、男の方が実行者です」
「そうですか、それはよかった」
「しかし夕子さん、魔法を使ったとしか思えない、夕子さん何か言っていますか」
「いや、何も言わないが」
「ぜひ聞いて教えてください、山岡のやつもわけが分からないと悩んでいます、彼女は魔女か、などと言って」

夕食は山菜料理、田舎料理だが旨くて温泉も気持ちよかった、私たち以外の宿泊客は二組の夫婦だけ、都会人にとっては信じられない静けさだ。
「おい夕子、どうして犯人がわかったんだ？吉森もたまげているぜ」

「山岡さんだったわね、彼の推理、ほら、おかしな制服が隠れ蓑になった、と言うところは満点ね、推理通り加害者は従業員の制服を着て裏口から逃げたのよ」
「だから、もともと着ていた和服や背広の処分をするだろうと網を張ったんじゃないか」
「そうよね、でもあれ館内に仲間なんていなくても簡単に持ち出せるの」
「しかし、荷物を持って外に出た従業員はいないことをビデオで確認したと言ってたじゃあないか」
「従業員が持ち出したのじゃないわ、持ち出したのは宅配便の人よ、このごろ大きな荷物や土産物など、宅配便に頼む人多いでしょう」
「うん？そうか、しかしどうやって？」
「吉森さんの話を聞いていて、犯人の持ち物のことが気に

なったの、これは山岡刑事と同じね、裏口の近くに宅配便を頼まれた荷物の保管場所があったわ、後は簡単よ、係りの人に調べてもらったの、宿泊客ではない差出人の荷物はないかって、一つ見つかったの、その荷物に書いてあった宛先が吉森さんに教えた名前と住所よ、荷物の大きさも重さも予想とぴったりだったわ、荷物をもって保管場所に行く、後は係りに、これも頼むと渡すだけ、従業員に化けてるんだから疑われることもなかったのね」

「夕子が席を立ったのはそれを調べるためだったのか」

「そう、その後岸沢さん探していると、いやに嬉しそうににやにやしてる人に出会ったの、で彼の後に付いてロビーに帰ったらその人が山岡さんだったわけ」

「しかし夕子人が悪いぞ、吉森たち一晩張ってたんだぜ」

「あんなに喜んで得意そうにしゃべってた山岡さんをあ

の場でやっつけるの可愛そうだったのよ、吉森さんにはちょっと悪かったわね」
「そうか、山岡は荷物の間違いさえしなかったら」
「もう喬一しっかりしてよ、それだけじゃないわ、一人の女性に六人もよってたかってどうしようというの、山岡さんによれば七人になるけど」
「えっ、六人じゃないのか」
「結婚記念という大切な会にどうして遅れるのよ、それも二組も、遅れるのが分かってたら最初から遅い時刻で予約すればいいし、その日の突然の事情でもホテルへの電話一本で済むことね、そろって行けばいいのにどうしてばらばらに現れたの」
「うん？どう言うことだ？」
「本当は二人だけだったのよ、彼らの登場はこうだと思う

わ、まず二人で部屋に入る、そこで目的の女性を絞殺、被害者の制服を脱がせそれを着た女性が更衣室から男性用の制服を探して持って来る、下調べぐらいしてたのかも、制服を着て従業員になりすました二人はいったんホテルの外へ、外でまた背広や洋服に着替える、近くにワゴン車でも止めていたのね、そしてまたフロントへ現れる、これで二組目四人が登場、三組六人目も同じことね、二度目から制服はもうバックにでも入れて持ち込むだけだし」

「なるほど、後の客は最初の二人の変装と言うわけだな」

「そうよ、変装と言っても付け髭や鬘だとバレ易いわね、それに短時間では無理だし、眼鏡と眼鏡なし、和服から洋服などはこの場合ぴったりよ、フロントの係りは意外と客の顔は見ていないの、着ているものや靴で客の値踏みをするのね」

「しかしどうしてそんな手の込んだことを？」
「喬一、さっきから『しかし』って何度言ったと思う？でも面白いことするわね、まだ詳細は分からないって言うけど、きっと犯人夫婦ってマジシャンか詐欺師よ、これってそんな人たちの発想、目的は捜査を混乱させるためだと思うけど、被害者の制服を脱がすだけでいいのに裸にしたのもそれね、被害者は加害者の何かを知って脅迫でもしてたんじゃないかしら、会うことは双方が打ち合わせてたんでしょう、でないと加害者のいる部屋へ被害者がうまく現れるはずがないから」
「なるほどなあ…結婚記念日は口実か、六人が消えたんだからまあ幽霊記念日だな」
「喬一、忘れてるの？今日は私たちにとっても記念日だと言うこと」

「うん？そうだったかな、俺の誕生日でもないし、夕子のでもないぜ」
「オシリ記念日」
「何だそれ？サラダ記念日なら聞いたことがあるが」
「ほら消えたでしょ、六人でなく八人だけど、あそこでね、私が喬一に初めてオシリヲブタレタ日」

夕子と旅行すると決まって事件にめぐり合う、だが今回の旅行は楽しかった『また行きましょうね』と言った夕子の言葉に異存はない、ただし費用は全てこっち持ちなのを除いて…これは後日吉森からの報告だが、加害者は二人、詐欺師だろうと言った夕子の推理も予想も当っていた、被害者も詐欺師だったがホテルの従業員になってからはまじめに働いていた、しかし加害者二人に『前身をばらすぞ』と脅迫されていたのだ、いつまでも続く金銭の要求に耐えられなくなったのだろうか、被害者は『自分の前身は知られてもいい、お前たちを告発してやる』と言い出したのだ、これが殺人の動機だったと言う。

夕子は予想でさえもぴたりと当てる、正に魔法だ、私としては、『夕子たまには間違えろ、その方が可愛い』と言いたいところだが、それを言うと魔女の怒りが…

まったくの駄作ですが読んでくださっている方に…

赤川次郎氏の原作を読了していることを前提にしています、未読の方はぜひお読みになることをお勧めします。

次の順で読んでいただけると幸いです、幽霊読書会、贋作幽霊園遊会、贋作幽霊候補生Ｐ２、そうでないと時々わけの分からない会話や説明の無い人物に出会うと思いますがこれは作順に沿っているためなのでご容赦ください。

パブーの表示で読みやすいように縦書きでスクロール不要にしました、ところがこれだと後の訂正が非常に面倒になるため、誤字や脱字などがそのままになっているところがよくあります、見苦しい点をお詫びします。

ここに登場する人名は全て架空のものです、万一同名の方がいてもなんら関係はありません。

贋作幽霊記念日

http://p.booklog.jp/book/72098

著者 : tontokaimo39
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/72098

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/72098

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ